

防災まちづくりに向けた古地名呼称の活用可能性に関する基礎的研究*

Availability of an old place name for disaster prevention planning*

柴田 久**・石橋知也***・村橋里美****

By Hisashi SHIBATA**・Tomoya ISHIBASHI***・Satomi MURAHASHI

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

元来、我が国の地名は、漢字などの文字記号（書きことば）が普及するまで、音声記号（話しことば）である「ヤマトコトバ」により伝播継承されていた。特に日本の古い地名の90%以上は地形を表し、その多くは崖や崩壊地形を意味すると言われている¹⁾。つまり地名とは、人々が土地の姿形や集落の特徴を眺め、それらを呼称したものが社会的に認知・共有されたものと捉えられる。したがって、古い地名の語音は地形の姿や特徴を知らせ、自然災害との密接な関係を持ち得ていたものと考えられる。このことから古い地名の呼称をヤマトコトバによって解釈することで、その土地が潜在的に持っている特徴を再認識し、そのことから災害の危険性を含む土地への危機感や、行政ならびに住民の防災意識向上を図ることができるのではなかろうか。

以上のような問題意識から本研究では、福岡県内の12区域を対象に①土砂災害等の恐れがある箇所において現存する古地名呼称をヤマトコトバによって解釈し、②呼称に含まれる災害の危険性を示唆するコトバの抽出から、防災まちづくりに向けた古地名呼称の活用可能性について検討する。

(2) 先行研究と本研究の位置づけ

地名を対象とした先行研究として、笹谷らは地名の取り扱い方について基本的な考え方を整理するとともに、地名語彙の定量的、基礎的な知見を提出している²⁾。さらに仲間は公称地名の分布の特徴を地理的要件と照合することにより、地区のイメージの分布、伝播の要因を解明している³⁾。一方、谷口らは地名の命名行為に着

*キーワード：防災、まちづくり、古地名呼称、

**正員、博士(工学)、福岡大学工学部社会デザイン工学科
(福岡市城南区七隈八丁目19-1

TEL092-871-6631, hisashi@fukuoka-u.ac.jp)

***正員、修士(工学)、福岡大学工学部社会デザイン工学科

****正員、株式会社クリーブ

(東京都中央区八丁堀4-9-4西野金陵ビル7階、
TEL03-5541-6070, FAX03-5541-6071)

目し、地域間競争とその要因について分析を行っている⁴⁾。また森らは通称地名に着目し、その景観的特徴を明らかにしている⁵⁾。これに対し、小川は一連の文献にて地名と災害との関係について報告を行っている⁶⁾。しかし、実際に作成されたハザードマップをもとに、土地の特徴をより反映した「ヤマトコトバ」による古地名呼称の防災に向けた有用性を検証した土木計画学的研究は未だ見られない。

(3) 研究手順

本研究ではまず福岡県砂防課から入手した土砂災害危険箇所MAP⁷⁾ (県内15の土木事務所管轄区域ごとに作成。以降、MAP) から、土砂災害の恐れがある箇所(以降、危険箇所)ならびに過去に土砂災害の被害を受けた場所⁸⁾の多い12区域を対象エリアとして選定した。これにより対象エリアに示された危険箇所として396の地名が抽出された。次に明治14年に内務省地理局が全国の府県に命じて作成した地名簿「筑前國字小名取調帳」⁹⁾「豊前國字小名取調帳」¹⁰⁾をもとに、上記396の危険箇所地名の中から、明治期以前からあった「古地名」を259 (65%) 抽出した。さらに福岡県防災マップ、各種航空写真・地図等を参照しながら、それら抽出された259古地名の土地状況を把握した。これらの結果を照合しながら、古地名呼称の意味を地名語源辞典^{11), 12)}、方言辞典¹³⁾を用いて解釈し、災害の危険性を示唆するヤマトコトバの抽出を試みた。

2. 福岡県内の土砂災害と危険箇所MAPの概要

福岡県で土砂災害が発生するおそれのある危険箇所は13150箇所、さらに危険箇所内に位置する人家は53249戸(平成15年まとめ)を数える。前述したMAPでは、土砂災害として「がけ崩れ」「土石流」「地すべり」の3種類を設定し、各区域内の危険箇所を地図上に明示している(図-1)。

これまで福岡県内における土砂災害の多くは6~9月の梅雨や台風の時期に発生している。MAPではエリア毎のがけ崩れ、土石流、地すべりの危険箇所をそれぞれ

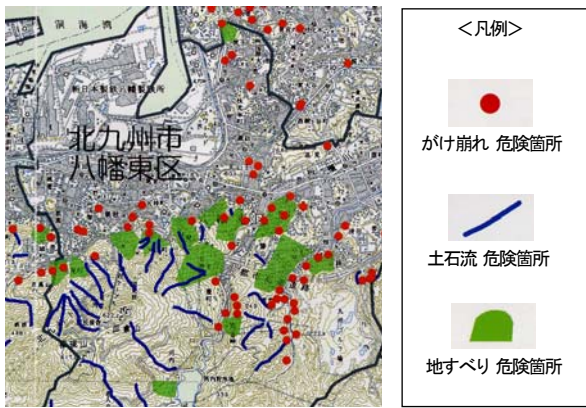


図-1 土砂災害危険箇所 MAP

「急傾斜地崩壊危険箇所」、「土石流危険渓流」、「地すべり危険箇所」として明記している。

3. ヤマトコトバによる危険箇所の古地名解釈

(1) 地名解釈に対するヤマトコトバの有用性について
日本で本格的に地名を取り上げた最初の文献は和銅6(713)年に元明天皇によって編纂が命じられた「風土記」と言われる。既に人文地理学の分野では地名の語源に着目した先行研究が数多く存在するものの、未だ解明されていない部分も多く、地名解釈に対する方法論の確立にまでは至っていない。

周知の通り、現在、地名は漢字による表記が一般的である。しかし、元々、語音である「ヤマトコトバ」によって伝えられていた「古地名」は、長い年月を経て呼称が変化し、原形が見えにくくなったとも言われている¹⁾。福岡の古地名に詳しい郷土史家の池田氏によれば、松・竹・梅などの縁起の良い好字や佳字が当て字として地名に使われ、漢字の持つ様々な音訓によって、地名の持つ本来の音が失われたケースもあるとの知見が得られた。つまり、地名が漢字で表記されたことで呼称が変化し、それにより元々の地名の意味までも変化した可能性が指摘できる。

よって本研究では、地名に見られる現在の漢字からその由来を見出すのではなく、現地の地形と古図を確かめながら、方言などの地域特有の発音や呼び方を地元自治体からのヒアリングによって把握し、地名の「呼称」からヤマトコトバの抽出と意味を解釈する方法を採用した。ヤマトコトバの抽出例を表-1に示す。古地名呼称には、

表-1 ヤマトコトバによる古地名呼称の分析例

	パターンⅠ	パターンⅡ
古地名呼称	「はた」	「まるやま」
	↓	↓
ヤマトコトバ	「ハタ」	「マル」「ヤマ」

1つの地名呼称が1つのヤマトコトバで構成されるもの(パターンⅠ)と複数のヤマトコトバで構成されるもの(パターンⅡ)に大別されることが明らかとなった。

(2) ヤマトコトバによる危険箇所地名の解釈

本研究で対象とした12区域の危険箇所地名数とこれに含まれる古地名数、加えてそれら古地名呼称の意味と危険箇所との一致数を表-2に示す。古地名呼称の意味解釈の結果、ほとんどの呼称は「崩壊地形」「湿地」「谷」「河川のそば」(地形用語は文献12に準拠)といった地形を示唆する意味を含むことが明らかとなった。さらにこれが危険箇所と一致したものは、259古地名中198地名(76%)であった。また一致した古地名呼称は「浸食地形」や「崖」「激しくえぐれた地形」「湿地」などの危険性を示唆する意味を多く含むことが確認された。ここでは紙幅の関係から、12区域のうち早良区に対する分析結果を示す。

早良区は、昭和40年代から住宅地化が著しく、大型団地が次々と建設され、人口も増加している地域である。早良区では、存在する全危険箇所地名数42のうち、古地名は36箇所(全体の86%)存在していることが把握された。またそれら36箇所をMAPに示された3種類の危険箇所によって分類し、それぞれ地名呼称の意味解釈を行った(表-3)。その結果、呼称の意味と危険箇所が一致した古地名は24箇所(67%)抽出された。さらに早良区では、MAPに示された「がけ崩れ」ならびに「がけ崩れ+土石流」の危険箇所とヤマトコトバによる古地名呼称の意味との一致が多く見受けられた。

さらにヤマトコトバとして早良区内の「がけ崩れ」危険箇所該当する古地名「三郎丸」では「崩壊地形」を示唆する「マルグ」からきた「マル」を含んでいることが把握された。さらに「城ノ原」では同じく「崩壊地

表-2 古地名呼称の意味と危険箇所との一致数

自治区名	全危険箇所地名数(現在)	古地名数(率)	古地名呼称の意味と危険箇所との一致数(率)
早良区	42	36(86%)	24(67%)
筑穂町	39	36(92%)	30(83%)
篠栗町	43	22(51%)	17(77%)
久山町	12	9(75%)	7(78%)
宇美町	22	16(73%)	13(81%)
門司区	45	17(38%)	14(82%)
八幡東区	27	8(30%)	6(75%)
若松区	26	19(73%)	16(84%)
太宰府市	36	22(61%)	16(73%)
宗像市	52	32(62%)	21(66%)
大島村	12	12(100%)	8(67%)
玄海町	40	30(75%)	26(87%)
全自治区	396	259(65%)	198(76%)

形」を示唆する「ハルク」からきた「ハル」を呼称に含んでいることも明らかとなった。また「門戸口」では「崩壊地形」と「湿地」を示唆する「クチル」からきた「クチ」が地名呼称より把握されている。その他、「がけ崩れ+土石流」の危険箇所該当する「重留」は2つ

の古地名呼称を持ち、さらに「がけ崩れ」危険箇所の「一ツ家」は「包み込まれた地形」という意味を持つ一方で、現在は隣接する地名「仙道」と合わさって「一ツ家仙道」に呼称が変化している。さらに「がけ崩れ」の危険箇所に該当した「中山」の「ナカ」は「崩壊地形」、

表-3 ヤマトコトバの抽出と意味解釈結果（早良区）

古地名 古呼称 ヤマトコトバ	意味	古地名 古呼称 ヤマトコトバ	意味
「がけ崩れ」の危険箇所			
宮ノ下 みやのした ミヤ・ノシタ【シダ】	ミは接頭語で美称、もしくは「水」で「川、湿地」のこと、ヤも「湿地」のこと。ノは助詞、又「緩傾斜地」、又「沼」の転で「沼、湿地」のこと。シタは副詞シタシタより「湿地」、もしくはシタの清音化の動詞シタル(垂)の語幹で「懸崖、急傾斜地」のこと。	三郎丸 さぶろうまる サ・ホリ・マル【マルグ】	サは接頭語、プロはホリをを読み替えたもの。ホリは「堀、穿」で「えぐり取られたような地形」のこと。マルは動詞マルグ(転)などから「崩崖、地滑りなどの崩壊地形、浸食地形」のこと。 →現在は「三郎丸(さぶろうまる)」と呼称。
伊田尻 いたしり イタ【キダノキ・タ】・シリ	イタは動詞イタム(損、傷)の語幹で「崖」の意味。又、キダ(刻)の転で「段丘」のこと。もしくは、イ(キ)・タ(田、処)で「水を汲み取る所」「湿地」のこと。シリはシリ又はシリで「末端」「裾」「出口」の意味。またはシリ(磨)の転で「崖」、シリと同じ「湿地」のこと。 →現在は「伊田尻(いたしり)」と呼称。	上ノ原 かみのはる カミ・ノ・ハル	カミは「上」で「高い所」、動詞カム(嚙)の連用形で「水などが岩や砂を激しくえぐる状態」のこと。ノは助詞、又「緩傾斜地」、又「沼」の転で「沼、湿地」のこと。ハルは「原」、もしくはハルク(私)から「崩壊地形」のこと。
宇土 うと ウツ	ウトはウツ(空虚)が転じた語で、「谷」や「崖」を指す。	平尾 ひらを ヒラ・オ【ヲ】	ヒラは「崖」「平野」を意味し、ヲは「尾」で「山裾の末端」のこと。 →現在は「平尾(ひらお)」と呼称。
下ノ畑 したのはた シボ・ノ・ハタ	シモはシボ(皺)の転で「皺のよったような状態、縮んだような地形」のこと。ノは助詞、又「緩傾斜地」、又「沼」の転で「沼、湿地」のこと。ハタは動詞ハタク(叩、砕)の語幹から「崩壊地形」、又はハ(端)・タ(処)で「ほとり、そば」が転じて「周囲」「外側」のこと。	城ノ原 じょうのばる ジョウ・ノ・ハル	シオはシボル(搾)から「シボル込んだような地形」、又動詞シホルの語幹などから「湿地」のこと。ノは助詞、又「緩傾斜地」、又「沼」の転で「沼、湿地」のこと。ハルは「原」、もしくはハルク(私)から「崩壊地形」のこと。
門戸口 もんどぐち モン・ト・クチ【フチ】	モンは「寺の門前」、又は「水門の存在」、トは「出入口」「狭くなった所」、もしくは形容詞トン(利)の語幹で「険しい地形」のこと。クチは「出入口」、又はフチ(縁)に通じ「端、ヘリ」、もしくは動詞クチル(朽、腐)の連用形から「湿地」「崩壊地形」のこと。 →現在は「門戸口(もんどぐち)」と呼称。	一ツ家 ひとつや ヒト・ツ・ヤ	ヒトは形容詞ヒトシ(均)の語幹で「凸凹のないさま」から「段丘面、山中の緩傾斜地」のこと。又フトコロ(懐)の「包み込まれたような地形」、「湿地」の意味もある。ツは助詞、又はヤツ(菴)の略で「湿地」「沼地」のこと。又はイハ(岩)の約。 →現在は仙道と併せて「一ツ家仙道(ひとつやせんだう)」となっている。
谷口 たにぐち タニ・クチ	タニは「谷」のこと。クチは「口」で「出入口」、又動詞クチル(朽、腐)の連用形から「崩壊地形」のこと。 →現在は「谷口(たにぐち)」と呼称。	原町 はるまち ハル・マチ	ハルは「原」、もしくはハルク(私)から「崩壊地形」のこと。
古賀 こか コ・カ	コは接頭語、カは接尾語で「場所」、またはクハ(桑)の転で「崖」のこと。 →現在は「古賀(こが)」と呼称。クは「崩」、ガは「処」で、「崩壊地形、浸食地形」のこと。	中山 なかやま ナカヤマ【ナカ・ヤマ】	「間の山」「山に入った中」のこと。【ナカは「山の間」又ナガの清音化からナギ(雞)の転で「崩壊地形、浸食地形」の意味。ヤマはイヤ(弥)・マ(間)から「高く突起した所」、「森林」の意味。】
「がけ崩れ+土石流」の危険箇所			
(上、北)石釜 いしがま イシ・ガマ	イシは「石」で「石の多い地」、又イソ(磯)の転で「断崖絶壁の岩山」のこと。ガマは「崖のえぐれてい込んでいる所」のこと。	西 にし ニシ	「西」のこと。又、動詞ニル(瀾)の語幹の清音化で「崩壊地形、浸食地形」のこと。もしくは、動詞ニジム(滲)の語幹の清音化で「湿地」のこと。
曲淵 まがりぶち マガリ・ブチ【フチ】	マガリは動詞マガルの名詞化したもので、「川や道路、山裾などの曲がった地形」のこと。ブチは「山の急に険しくなった所」、またはフチの濁音化したもので、「縁」で「川べり」「段丘の縁、すなわち崖」のこと。 →現在は「曲淵(まがりぶち)」と呼称。	野芥 のけ ノケ【ヌケ】	ヌケ(抜)の転で、「崖地」「崩壊地形、浸食地形」「地滑りの地」のこと。
梅林 うめばやし ウメ・ハヤシ	ウメは「埋め」で「砂などが堆積した地」のこと。ハヤシは「造シ」で「急傾斜地」、つまり土砂が堆積した急傾斜地のこと。	内野 うち ウチ・ノ	ウチは内で「入り込んだ地形」、打で「(崖などの)切り取られた地形」のこと。ノは「荒野」、又ウの転で「沼」「湿地」。
重留 しげどめ【しげどみ】 シゲトメ【シゲトミ】	シゲは動詞「シゲル」、形容詞「シゲシ」の語幹で、「草木が繁茂した状態」、又シゲの濁音化という見方からすれば、形容詞「シゲシ」の語幹で「荒地」のこと。トメは動詞「トム(止)」の連用形で「行き止まりになった所」、又トビの転で「崩壊地形、浸食地形」のこと。【トメはトビの転の動詞トフの連用形で「崩壊地形、浸食地形」のこと。またはトビの転のトフ(泥)と関係し、「湿地、泥地」のこと。】 →現在は「重留(しげどめ)」と呼称。	椎原 しいば 【しいばる】 シヒ・バ【バル】	シヒは「椎」、九州では「浸食谷」のこと。バは「場所」のこと。つまり「(背振山北麓に)入り込んだ処」「谷間の地形」のこと。【バルはハルの濁音化したもの。ハルは「原」、もしくはハルク(私)から「崩壊地形」のこと。】 →現在は「椎原(しいば)」と呼称。
(東、西)入部 いるべ イリ・ヘ	イリは入りの意味で「川上、上流」「谷あい」「山と山の間の沢」のこと。べはへの濁音化したもので「辺り、ほとり、そば」の意味。	飯場 いひば イイ【イヒ】・バ	イイ(イヒ)は「飯」で「飯を盛った形」のこと。バは「場所」のこと。
脇山 わきやま ワキ・ヤマ	ワキは「脇」で「(何かの)脇、そば」の意味。ヤマはイヤ(弥)・マ(間)から「高く突起した所」、「森林」の意味。	小笠木 おかさぎ オ・カサ・キ	オは接頭語。カサギは「嵩高(カサキ)」で、「高地」を指す。
「土石流」の危険箇所			
西山 にしあぶらやま ニシ・アブラ・ヤマ	「西」のこと。又、動詞ニル(瀾)の語幹の清音化で「崩壊地形、浸食地形」のこと。もしくは動詞ニジム(滲)の語幹の清音化で「湿地」のこと。アブラはアブ・ラ(接尾語)で「(崩崖などの)浸食地形、崩壊地形」のこと。ヤマはイヤ(弥)・マ(間)から「高く突起した所」、「森林」の意味。	板屋 いたや イタ・ヤ	イタは動詞イタム(損、傷)の語幹で「崖」の意味。又、キダ(刻)の転で「段丘」のこと。もしくはイ(キ)・タ(田、処)で「水を汲み取る所」「湿地」のこと。ヤはヤツ(菴)の略で「湿地」のこと。又イハ(岩)の約。
後川原 うしろかはら ウシロ・カハ・ハラ	ウシロは「裏、背後に当たる方向」、「(山などの)陰になった所、北側」のこと。カハは「井戸」「堀」のこと。ハラは「開墾地」「林」、「山麓」、又は「広い平野」の意味。 →現在は「後川原(あとかわはら)」と呼称。アトは「崖地、傾斜地」、又はアトで「湿地」のこと。	仙道 せんどう セ・ノ【タラ】	センドウはセ(狭、瀬など)・ノ(助詞)・ト(処)の転。セは「暗礁」、又は「山の側陵」のこと。ノは助詞、トは「場所」、又は形容詞トン(利)の語幹で「険しい地形」、「高く尖った地形」のこと。 →現在は仙道は「仙道(せんどう)」として内野に、一ツ家と併せて「一ツ家仙道(ひとつやせんだう)」として存在している。
後谷 うしろたに ウシロ・タニ	ウシロは「裏、背後に当たる方向」、「(山などの)陰になった所、北側」のこと。タニは「谷」「溪谷」のこと。	大浦 おおうら オホ・ウラ	オオは美称で、ウラは「上流」等の意味を持つがここでは「末(ウレ)」「下、下方」のこと。
峯 みね ミネ	「高くなっているところ」のこと。	谷 たに タニ	タニは「谷」のこと。
池田 いけた イケ・タ	イケは本来「水気のある所」をさす語で川・湿地等を指すこともある。タは接尾語で「場所」、トの転で「耕作地、水田」のこと。 →現在は「池田(いけた)」と呼称。	新飼 しんかい シン・カイ	シンは「新」で「新開墾地」、カヒは「飼」で「家畜の飼育による地名」。

※ はヤマトコトバによって解釈した古地名呼称の意味と土砂災害危険箇所MAPが一致。

「がけ崩れ+土石流」の危険箇所該当した「石釜」の「ガマ」は「崖のえぐれてくいでいる所」の意味を含んでいる。一方、これら早良区の危険箇所該当した古地名呼称より複数抽出されたヤマトコトバとしては「ハル/バル」（6箇所）、「ヤ」（3箇所）、「クチ」（2箇所）であった。特に「ハル/バル」は早良区の36地名から得られた全ヤマトコトバのなかで最も多い結果が得られた。

4. 危険性を示唆するヤマトコトバと防災への活用可能性

本研究で対象とした12区域より得られたヤマトコトバのうち、3地名以上の古地名呼称から抽出された24のコトバを表-4に示す。これより頻出したヤマトコトバは①「崩壊地形、浸食地形」「崖」「激しくえぐれたような地形」の意味を含むもの、②「湿地」の意味を含むもの、③これら①、②両方の意味を含むもの、3つに大別された。さらに抽出されたヤマトコトバのうち最も多くの古地名呼称に見受けられたのは、②「湿地」の意味を含む「ヤ」（15地名）であり、次いで①「崩壊地形」の意味を含む「ハル/バル」（14地名）であった。このことから、古地名呼称として「ヤ」や「ハル/バル」が含まれる箇所においては、防災上注意が必要といえる。加えて、それら危険性を示唆する意味のコトバは山地における古地名呼称に多く存在し、山地内でのインフラ整備の際には特に古地名呼称に関する情報収集や検討が有効といえよう。

以上、ヤマトコトバによる解釈と分析結果から、古地名呼称の多くが「地形」に関する意味のヤマトコトバを含み、同時に災害の危険性を示唆する傾向が把握された。古地名呼称の抽出とそこに含まれる意味を読み解くことで、その土地が潜在的に持っている危険性を認識させる一助となるだろう。さらにそれによって行政ならびに住民における防災意識の向上、災害に対する計画的な対策の検討を促すことができるのではないか。市町村合併等により消失する地名も増えるなか、防災まちづくりに向けた古地名呼称の今日的価値とその活用意義について再考すべきと考えられる。

表-4 危険性を示唆するヤマトコトバ

①「崩壊地形、浸食地形」「崖」「激しくえぐれたような地形」等の意味						
ハル/バル (14)	マル(8)	ナカ(8)	ジ(8)	ク(8)	ハタ/バタ (7)	ガ(7)
キ(6)	イシ(4)	ユ(4)	サカ(4)	ハナ(4)	ウチ(3)	アラ(3)
ヒラ(3)	キリ(3)	フル(3)				
②「湿地」等の意味			③「湿地」と「崩壊地形」等の両方の意味			
ヤ(15)	イケ(4)	シオ(3)	エ(8)	クチ(4)	ヨシ(4)	ニシ(3)

※()内は古地名呼称からの抽出数

5. 結論

本研究では、古地名呼称をヤマトコトバにより解釈し、防災まちづくりに向けた古地名呼称の活用可能性について考察した。本研究の成果を以下に述べる。

- 古地名呼称は地形との深い関係を持ち、特に「崩壊地形」、「崖」等の危険性を示唆する意味が多く含まれていることが確認された。
- 対象とした福岡県内12区域における危険箇所の地名396のうち現存している古地名は259（65%）あり、そのうち古地名呼称におけるヤマトコトバの意味と危険箇所との一致は198地名（76%）であった。
- 古地名呼称に含まれる本来の意味を読み解き、その土地が持つ危険性を検討することで、行政・住民の防災意識の向上ならびに災害に対する計画的な対策検討を促す可能性を示唆した。
- 市町村合併によって消失する地名が増えるなか、防災まちづくりに向けた古地名呼称の今日的価値とその活用意義を提起した。

謝辞：本研究を進めるに当たり、郷土史家の池田善朗氏より貴重な資料と有益な情報を提供して頂いた。ここに記して謝意を表します。

参考文献

- 池田善朗：筑前故地名ばなし，pp. 3-5，海鳥社，2004
- 笹谷康之ほか：小地名を用いた環境情報の研究，pp. 463-468，日本都市計画学会学術研究論文集，1989
- 仲間浩一：地名呼称の分布に見る地区イメージの伝搬に関する研究，pp. 607-612，日本都市計画学会学術研究論文集，1994
- 谷口守ほか：地名命名行為に着目した認識上での地域間競争とその要因分析，pp.225-232，土木計画学研究・論文集，No.13,1996
- 森貴規ほか：通称地名からみた谷戸の景観構成と視覚構造に関する研究，pp. 871-876，日本都市計画学会都市計画論文集，No. 40-3, 2005
- 例えば小川豊：崩壊地名，山海堂，1997
- 福岡県砂防課：土砂災害危険箇所MAP，福岡県，2003
- 福岡県砂防課：砂防，福岡県，2005
- 内務省地理局編纂物刊会：全国村名小字調査書第4巻 pp. 20-206，ゆまに書房，1986
- 同上書，pp. 446-516，ゆまに書房，1986
- 楠原佑介ほか：古代地名語源辞典，東京堂出版，1981
- 楠原佑介ほか：地名用語語源辞典，東京堂出版，2000
- 東條操：全国方言辞典，東京堂出版，1999